

敦煌莫高窟で考えたこと

第一生命経済研究所 特別顧問 松元 崇



日本中国文化交流協会が実施するツアーに参加して敦煌の莫高窟を訪れてきた。東京から北京まで3時間余り、北京からさらに3時間ほどかけて到着する敦煌は、かつて中国において中原(黄河中下流域)の勢力が隆盛なときには、その勢力の西北支配の重要拠点となり、弱いときには異民族による多くの小王国が栄えていた。それは、井上靖の多くの小説に描かれている。

敦煌莫高窟の始まりは、同地で出土した資料によれば、匈奴、羯(ケツ、匈奴の一派)、鮮卑(モンゴル系)、氐(テイ)、羌(キョウ、ともにチベット系)の五胡と呼ばれる北方や西方系の諸民族が華北に進出して戦争を繰り返した五胡16国の時代、楽尊(らくそん)という修行僧(沙門)によって洞窟が掘られたのが最初とされる。丘の斜面に700余りの浅い洞窟があり、そのうち400余りに壁画が描かれ仏像が安置されている。華麗な壁画は、隋、唐の時代のものが多いが、インドの影響を色濃く示して興味深いのは、北涼(397-439年)や北魏(386-534年)の時代のもの。そのころ敦煌は、インドから中国へのいわゆるシルクロードの要衝で、仏教は敦煌を経て中国へと伝えられていった。北魏(鮮卑族)王朝は仏教を厚く信仰したが、その背景には、新興胡族国家の君主が、従来の漢民族支配による儒教イデオロギーに代わる新たな支配イデオロギーを仏教に求めたことがあったとされている。そもそもインドで興った仏教は、宗教的価値が世俗的価値に優先する「教主王従」だったが、北魏では政権の支配イデオロギーとして「王主教従」という形で受け入れられたのである。そういわれてみると、我が国に伝わった仏教も、最初は鎮護国家という形であった。

それが、平安時代末期の末法思想の流行などを経て一

般の人々の救済を柱とする浄土真宗や武士の精神修養などを重視する禅宗といった形になっていった。それは、日本土着の八百万の神を信仰する神道とも習合して「教主」のインド仏教の原初の姿に戻っていったものといえよう。

中国では、仏教の出家が「家」の秩序を破壊するなど儒教論理に合わないとして何回かの迫害(廃仏)が行われた。北魏の大武帝(423-452年)の時代には、あまりにも多くの人が出家して税金を納めなくなったので廃仏が行われたという。人によっては、それに約半世紀前の文化大革命を加える。文化大革命の時には、敦煌でも古いお寺の文物は全て破壊されてしまった。町から遠かった莫高窟は破壊をまぬかれたのだという。そのような中国の歴史を振り返ってみると、日本で、奈良時代以来の東大寺正倉院などが、今日まで昔の姿で残されていることは、奇跡のようなことである。

ダイバーシティの大切さが叫ばれる今日、かつての多様な東西文明の交流を示してくれる敦煌は、多くの人に見てもらいたい文化遺産である。と同時に、多様な文化遺産を破壊してきた人間の営みについても考えさせられる遺産である。新たな価値に基づいて、かつての価値を否定するところに進歩がある。しかしながら、新たな価値の方が本当に正しいかどうかは、後になってみないとわからない。古いものも含めてダイバーシティを大切にしていかなければならないゆえんである。世界が、IS(イスラム国)のテロに振り回されるようになった今日、他者の価値を全否定しない日本流のやり方でのダイバーシティが広がれば、世界に新たな繁栄をもたらすのではないか。そんなことを考えさせられた敦煌訪問であった。